



Title	熱帯医学情報提供について
Author(s)	大渡, 伸
Citation	センターレポート, 16, pp.3-5; 1997
Issue Date	1997-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/25669
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-16T23:47:31Z

2. 投稿

熱帯医学情報提供について

熱帯医学研究所・疾病生態

大渡 伸

ohwatari@net.nagasaki-u.ac.jp

熱帯医学研究所ホームページ

1996年1月30日に、英文の熱帯医学熱研究所のホームページ (<http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp>) を立ち上げ、和文については9月10日にスタートした。その内容は、毎年改訂される熱研紹介冊子に記載されている、研究所の組織および人員構成、沿革、現在の研究内容等に関する文章・図をイメージスキャナー (SHARP, JX-330M) で取り込み、Mac Reader plus V.2.5 を使い読み取った。しかし、英文および和文についても読み取りミスが多く、大半の時間が訂正作業に裂かれ、OCRの完成度はまだ低いと思われる。

本年1月末日の時点で、総アクセス件数は22548件であった。立ち上げ当初の国内と海外の比率は、81:19であったが、徐々に海外の比率が増加し、和文スタート後も傾向は変わらず、現在では56:44である。当初、1000件前後のアクセス件数/月も増加し、本年1月には2033件と約2倍に達した。特に、10月(3649件)、11月(2724件)のアクセス件数の増加は、長崎で1996年11月17日から6日間開催された国際熱帯医学会に関連していると思われる。この間、海外から本研究所教官のe-mail addressの問い合わせ等の簡単な連絡から、熱帯地で研究や医療活動を行っている日本人からの専門的相談までe-mailで入ってきた。専門的内容については、研究所内で関連する研究分野の先生方に連絡し、回答をお願いしている。

ホームページを開設して1年間で2万件を上回るアクセスがあった。アクセスした総ての人達が、熱研や熱帯医学に深い関心を持っているかは疑問だが、一般の方々にも熱研について知ってもらう効果は十分あったと考える。更に、これらの方々の数人でも熱研を訪れ、熱帯医学に興味を持つ糸口となる事を期待している。2万部の熱研紹介冊子を印刷し、郵送または配布する経費や労力を考えると、インターネットによる情報提供は効率的である。

医学情報

インターネット利用人口は、企業や教育・研究機関は勿論、一般家庭においても、ここ数年で急速に増加している。私も、文献検索やe-mailによる通信、およびインターネット上での学会発表など、幅広く活用している。特に、時間のロスが減少したのは、歓迎すべき事である。しかし、多くの情報の中から必要な情報を迅速に見つけ出す。また、氾濫する情報の中から、必要な情報を適切に取捨選択する能力が必要となった。

情報発信のサーバとして報道機関、公共機関、企業、更には個人で開設したホームページも有り、種々の情報が見られる。しかし、医学関連情報は、医学部、医科大学および医学系研究所等の紹介に関する情報を除くと、他の分野の情報と比較して僅かである。不特

定多数を対象とする医学情報、特に医療情報については情報を受けたクライアント側の人が、情報内容や本人の健康状態等の諸条件により、精神的不安に陥りたり、肉体的変調をきたす危険性も含んでいるため、情報提供については慎重にならざるを得ない。情報は正確かつ詳細であるべきだが、それ故に生じる事象に適切に対応出来る体制を備えてなければ、医療情報の提供は「百害有って一利無し」となる可能性が高く、常に即応可能な体制作りが必要である。何れの分野の情報でも同じであるが、特に医療情報では、提供した情報に対する責任は重い。しかし、医療を含む医学情報も他の分野と同じく、情報提供されるべきで、特に、病気に罹らないための予防医学の知識については、情報提供を積極的に行うべきである。予防医学の知識の重要性は、HIV（エイズウイルス）の例を引くまでもなく、明らかである。

熱帯医学情報提供

国際化が進み、また交通機関の発達により、時間的距離が短縮された結果、輸入感染症が問題となっている。一部の病気については潜伏期間中に、既に帰国し二次感染を起こす事態では、総ての人々が海外の感染症に罹る可能性が有る。また、熱帯地への旅行者や仕事等による長期滞在者も、年々増加している。和文の熱帯医学研究所ホームページを立ち上げた9月以降、海外から和文へのアクセスが多数みられた例からも、彼等への、熱帯医学情報提供の必要性を痛感した。

海外の医療情報については、WHO, CDC, Medscape, Health Canada 等があり、感染症などの統計データの提示から、問い合わせに応じるホームページまで有り、インターネットを十分活用している。しかし、言葉の問題もあり、日本人による海外医療情報の利用度は低い。国内では、早期に立ち上げた姫路獨協大の「マラリア情報ネットワーク」を含め、徐々に増加している。また、厚生省が「海外渡航者保健情報システム」を作ることになっている。しかし、1つのサーバで総ての情報を網羅することは困難で、1つでも多くのサーバが望まれる。これからも、インターネットの利用者は増加し、WWWによる情報提供の有効性は高まるであろう。

今回、熱帯医学研究所では、資料室が「熱帯病資料情報センター」に改組される予定である。このセンターの設立目的は、(1) 熱帯病の基礎研究推進、(2) 熱帯病専門医の育成、(3) 熱帯病資料提供である。センタースタッフは、熱帯医学の基礎研究を行うと共に、上記の目的を遂行する。その業務は多岐にわたるが、熱帯病資料提供の一環として、不特定多数を対象とする熱帯医学情報の提供を計画している。昨年より、近年本所研究者が、熱帯地の現地調査で得た資料や研究結果について、情報提供の準備を行っている。この情報は、まだ公開してませんが、その一部を小坂所長、和田教授、鈴木助教授と共に、皇太子御夫妻へ御説明した時の写真である。(次ページ)

熱帯医学研究所には、風土病研究所設立（昭和21年）以来集められた、熱帯病に関する資料や研究成果が保存されている。現時点では、まだコンピュータ設備が完備されていないが、50年間に蓄積された多数の資料についても、上記の目的に沿って情報を公開し、我々の研究が多くの人々のお役に立つことを望んでいる。特に、インターネットによる情報提供の効果に期待している。

